

# 夢風便り

ゆめかぜだより

Volume

3

特集

## 輝ける碧き空の下で 遠州ブラジル移民史



遠州偉人列伝

“湖郷”を愛した心優しき吟遊詩人  
清水みのる

ワンデイ・トリップへの誘い

引佐町奥山



## Contents



### 3 特集

## 輝ける碧き空の下で 遠州ブラジル移民史

### 10 遠州偉人列伝

“湖郷”を愛した心優しき吟遊詩人  
清水みのる

### 15 I Love Hamamatsu! 浜松大好き! セバスティアノーさん

### 16 ワンディ・トリップへの誘い 美しき里山の風景を探して／引佐町奥山

### 20 輝く未来人 浜松市 守屋拓海さん

### 22 われら夢風カンパニー File : 05 株式会社ベストプラス File : 06 鈴木洋服店

### 26 いきいき悠々倶楽部 浜松市 藤井克治さん

### 28 天浜線 人と時代をつなぐ 花のリレープロジェクト

### 32 未来に残したい遠州遺産 新宮池



特集

# 輝ける碧き空の下で

## 遠州ブラジル移民史

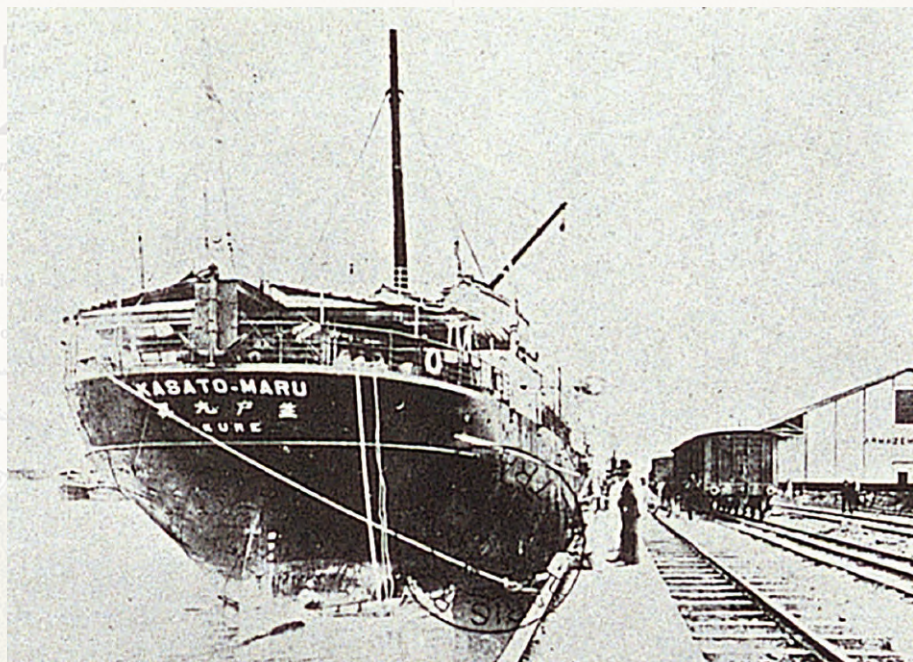
明治41年(1908年)6月18日。日本からの第1回ブラジル移民を乗せた「笠戸丸」は、サントスの港に接岸した。上陸した移民たちを指導し、開拓を成功に導いたのは、遠州生まれの一人の青年だった。時は流れ、現在。移民たちの子孫は「日系ブラジル人」として遠州の地に渡り、着実に定着している。そんな遠州とブラジルの深い縁をひも解いてみよう。

モノクロ写真：  
ジュニオール・マエダ氏





# 一獲千金の夢を乗せ、 笠戸丸は太平洋を渡った



▲781名の日本人移民を乗せ、サントス港に接岸した「笠戸丸」【※】

## 第1回移民の日本人たちは 正装でサントス港に上陸

「輝ける碧き空の下で」。これは「どくとるマンボウ」シリーズなどで知られる小説家、北杜夫氏が著した長編小説のタイトルだ。ブラジル日本移民の歴史を生き生きと描いた同書は、日系ブラジル人社会でも人気が高い。今回、北氏への敬意を込めて、特集名に同書のタイトルを使わせていただいた。

さて、第1回ブラジル移民船「笠戸丸」は、明治41年(1908年)4月28日、781名・167家族の日本人移民とともに神戸港を出発した。ただ、移民とはいっても彼

らの目的は「定住」ではない。「ブラジルには金のなる木、コーヒーがある」という移民会社の宣伝文句につられ、一獲千金を夢見て「笠戸丸」に乗船した。「2、3年したら、

大金を持って故郷に錦を飾ろう」。つまりは「出稼ぎ」ということだ。

貧しかった当時の日本では海外への移民が奨励され、19世紀末からはハワイ、アメリカ本土への移民が急増。しかし、低賃金でも勤勉に働く日本人は「米国人の仕事を奪う」として、やがて排斥されていく。これに苦慮した日本政府は、新たな移民の送り先として中南米にターゲットを振り向けた。中でも期待されたのは、世界最大のコーヒー豆生産国であるブラジルだ。ブラジルのコーヒー農園では、奴隷制度の廃止によって労働力が不足。これを補うために、海外からの移民が喉から手



▲第1回移民を指導した平野運平(前列中央)らの「通訳五人衆」



▲入植当初に移民たちが住んだ開拓小屋【※】

が出るほど欲しかった。結果として両国の思惑は一致し、日本人のブラジル移民はスタートしたのだ。

「さあ行こう 一家をあげて南米へ」。当時のポスターには、このようなキャッチコピーが躍る。ともあれ「笠戸丸」は、神戸港からインド洋、アフリカ大陸南端の喜望峰を経て大西洋を渡り、「地球の反対側」のブラジルを目指した。航海日数は52日間。長い船旅の末、ブラジル・サンパウロ州サントスの港が見えた時には、船上の乗客から大きな歓声が沸いた。

サントスに上陸した日本人移民たちの服装はというと、男性は背広の上下に帽子をかぶり、女性はロングドレスに帽子と手袋という品のある姿。子どもたちも目一杯の正装だった。いずれも、「日本人として恥ずかしくないよ



▲耕地を拓く前に、巨木の生い茂る原始林を伐採しなければならない【※】

うに」との思いから、出発前に買い揃えた一張羅である。その時の姿は、現在、サントスにある「日本移民ブラジル上陸記念碑」のブロンズ像からうかがい知ることができる。

上陸後の日本人移民は、港から汽車でサンパウロまで移動し、いったん同地にある移民収容施設に入った。この時の様子を、当時の現地新聞は次のように伝えている。「移民は収容所に入るにあたり、秩序整然として列車から降り、少しも混雑の様様はない。またその車中を検査したら、唾を吐いた跡はひとつもなく、果物の残りくずの散乱も皆無。観察者をして不快感を起こさせるようなことはひとつもなかった」。今から1世紀前の日本人も、現代と同様に清潔好きで、モラルの高い人々だったようだ。

## 遠州出身の平野運平が 入植地のリーダーに

そんな移民たちは収容所で1週間ほど過ごした後、ブラジル国内の六つの大農場に「コロノ(農業労働者)」として送り込まれる。しかし、彼らは現地の言葉(ポルトガル語)を全く話することができない。そこで、移民たちと同行して農場に赴任したのは「通訳五人衆」と呼ばれる日本人の青年たちだった。5人とも、東京外国語学校(現在の

東京外大)で語学を学んだ同窓生。その中の一人が、遠州出身の平野運平という若者である。

運平は明治19年(1886年)、佐野郡初馬村(現在の掛川市)で、もとは掛川藩に仕えていた士族の榛葉家に次男として生まれた。幼い頃から聡明だった運平は、高等小学校を卒業後、名門・掛川中学(現在の掛川西高校)に進学する。同校在学中、運平は「外国語学校で語学を習得し、世界へ雄飛したい」という大志を抱くようになった。しかし、維新により俸禄を失った榛葉家の家計は苦しく、次男をさらに進学させる余裕はない。

それでも、両親は息子に夢を諦めさせようとはしなかった。「お前は親戚の平野家へ養子に行け。酒蔵を営む裕福な家だから、きっと学費を出してくれるだろう」。こうして、運平は磐田郡光明村下百古里(現在の浜松市天竜区)の平野家に入り、同家の支援で東京外国語学校へと進学した。

外国語学校での運平の専攻はスペイン語。かつてスペインは海外に多くの植民地を持ち、スペイン語は英語に次ぐ国際語だったからだ。平野、榛葉両家の期待を背に、運平は勉学に励む。そして、卒業を間近に控えた明治41年(1908年)の初め頃。運平らスペイン語専攻の学生たちに、担当教授から



▶ブラジル移住を提唱する移民会社のポスター





▲コーヒー豆を収穫する一家に訪れたつかの間の休息时间【※】

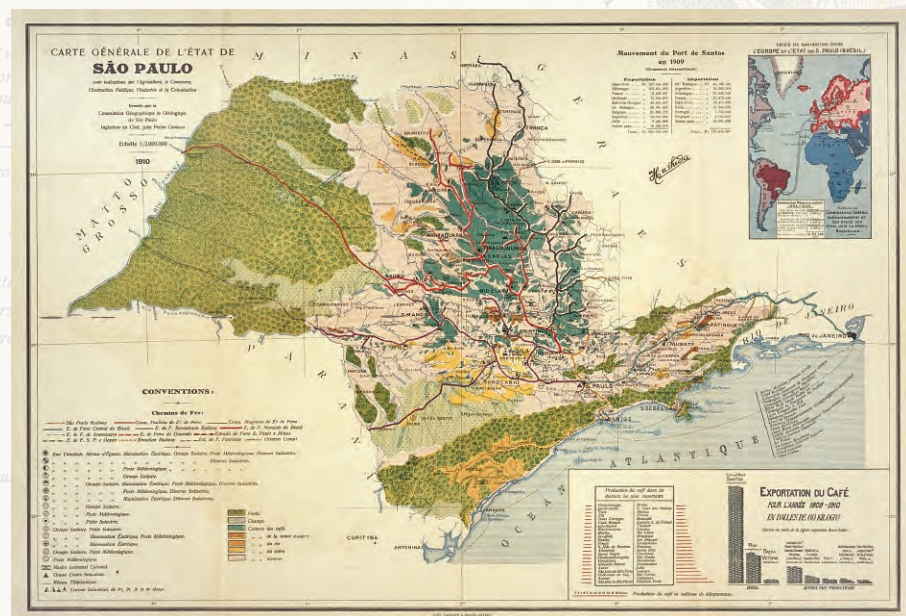
耳寄りな話が寄せられた。「移民会社がブラジル行きの通訳を募集している。ブラジルの公用語はポルトガル語だが、スペイン語と同じラテン語系だから何とかなるだろう。移民船の出港は今年の春だ」。

この募集に手を挙げ、採用されたのは、<sup>みねさかえ</sup>運平、<sup>もとひさ</sup>嶺昌、大野基尚、加藤順之介、<sup>にへいたし</sup>仁平嵩の5人。すなわち「通訳五人衆」だ。若者たちは移民とは別に、同年3月に日本を出発。シベリア経由でイギリスまで行き、そこから船でブラジルへ渡るといったコースだった。サントス港への到着は5月3日。その約1カ月後、5人は港で「笠戸丸」の移民たちを出迎えたわけである。

そこから、5人はそれぞれ別々の耕地へと移民たちを引率して出発したが、5人の仕事は単なる通訳ではない。九州、沖縄、東北などから来た雑多な人々のリーダーとして、入植を成功に

導く使命があった。しかし、これは学校を出たばかりの若者にはいささか荷が重い仕事であり、前途には大変な困難が待ち受けていた。

まず、到着の時期が遅かった。移民たちが入植した各耕地のコーヒー農園では、収穫の最盛期がすでに終わっており、採れるコーヒー豆は少ない。朝から晩までクタクタになるまで働いても、わずかな収入し



▲鉄道路線や各耕地を示した当時のサンパウロ州地図【※】

## 「平野植民地」を開拓し、日系社会発展の礎を築く

運平は、23家族、88人が入植したグアタパラ耕地という農場を担当した。ここでも入植者の生活は苦しかったが、農場の支配人に交渉して給料の前借りを認めさせたり、広い農場を馬で巡回して移民たちの仕事や生活の相談に乗ったりした。そうした真面目な仕事ぶりとリーダーシップが評価され、運平は副支配人に抜擢される。そうした運平の指導によって、グアタパラ耕地の収穫量は向上し、人々の生活はようやく安定していった。

やがて時は流れ、最初の入植から6年が経過した大正3年(1914年)。運平に大きな転機が訪れる。日本のブラジル領事から「日本人移民のための新しい植民地をつくってこないか」という要請があったのだ。これを快諾した運平は、すぐさま候補地選別に走り出す。自らアマゾンの密林に分け入り、適地を探すこと1カ月。ノロエステ鉄道ペンナ駅という場所から十数キロ奥に入った、川沿いの湿地帯を新たな入植地と定めた。「ここなら米ができる。米さえあれば日本人は生きていける」



▲平野植民地で開かれた仮装大会【※】

と運平は考えたのだ。

新天地への移住は、翌大正4年(1915年)8月から始まる。原生林の道なき道を切り開き、猛獣オンサ(ジャガー)の出る山中に野営して、目的地を目指した。到着後は、密林の伐採、山焼きなどをして耕地をつくる。米作に適した土地には稲を植え、コーヒー豆の作付けにも着手した。こうして開拓の進む農地は、誰言うともなく「平野植民地」と呼ばれるようになった。

「さあ、これからが本番だ」。誰もがそう思った矢先の11月中旬、ある異変が起きた。入植者の一人が高熱を発し、寝込んでしまったのだ。12月になると十数人が熱病にかかり、バタバタと倒れた。蚊が媒介する原虫感染症、マラリアのまん延だ。この時期、南半球のアマゾンは夏であり、湿地帯では蚊が大量発生する。人々のために米作にこだわった運平の真心がかえって仇となった。年が明けても感染の勢いは衰えず、満足な治療費もない中で、おびただしい数の犠牲者が出た。それでも運平ら入植者は歯を食いしばって耐え、地獄のような夏を乗り切った。

しかし、試練はさらに続く。大正6年(1917年)11月にはバッタの大群が植民地に襲来し、畑の作物を食い尽くしてしまった。さらに追い討ちをかけるように、干ばつ、霜害の被害が続



▲木から採取したコーヒー豆をざるに集め、空中に放り投げてふるいにかける【※】

く。まさに絶望的な状況だったが、人々は川の魚を採り、森のイノシシやシカを狩って命をつないだ。

こうした数々の困難を乗り越え、入植地によりやく平穏な日々が訪れつつあった大正8年(1919年)。平野植民地の建設に全身全霊を傾けてきた運平を恐るべき病魔が襲う。何日も続く高熱と全身の衰弱。この頃、世界的に流行していたスペイン風邪に、運平は冒されてしまったのだ。マラリアならキニーネという特效薬があるが、当時の新型インフルエンザにはなすすべがない。周囲の懸命な看護も空しく、運平は発病からほどなくして世を去った。享年34。かけがえのないリーダーの

早すぎる死は、植民地の人々だけではなく、すべてのブラジル在住日本人を大きな悲しみで包み込んだ。

しかし、運平不在の平野植民地はその後も発展し、耕地拡大、幹線道路の建設、大小の商店が並ぶ市街地づくりが進んでいく。それに伴い、入植者たちの暮らしは見る見るうちに豊かになっていった。この成功をモデルに各地で日本人植民地は大きく成長。やがては、日本人の功績を抜きにブラジル農業は語れないという域まで達する。その先鞭をつけた運平は、まさに日本ブラジル移民の恩人といえるだろう。

参考文献:松尾良一著「ブラジル移民の父 平野運平」



▲正装し、当時、高級品だった蓄音機を聞く日本人移民一家。まさに成功を象徴する光景だ【※】



# ブラジルの魂を胸に、父祖の地へ「帰還」

## 令和の時代に羽ばたく「ブラジル系日本人」

明治41年(1908年)の「笠戸丸」以降、多くの日本人が夢を抱いて移住したブラジルの大地。第2次大戦で一時中断したが、昭和28年(1953年)から移民は再開し、同48年(1973年)に移民船が廃止されるまで集団移住は続いた。そして平成元年(1989年)、日本の入管法改正によって全く逆の潮流が生じる。日本での就労が認められた日系ブラジル人が大挙して来日し、全国各地の製造現場などで働き始めたのだ。その中で、とりわけ多くの日系ブラジル人を引き寄せたのは、ものづくりが盛んな遠州地域だった。

「豊かになった日本でお金を稼ぎ、数年経ったら母国へ帰ろうと、日系ブラジル人たちは考えた。100年前の日本人ブラジル移民と同じ“デカセギ”の



▲「魂誠會」道場で子どもたちを指導する児玉館長

精神ですね。私の場合は日本で空手を学びたいと考えていたので、目的は少し違うのですが」。浜松市中区で空手道場「世界武道空手連盟魂誠會」を主宰し、日伯交流協会の副会長も務める児玉哲義館長はこう語る。

児玉館長は昭和40年(1965年)、サンパウロ生まれの日系二世。両親は戦後間もない頃にブラジルへ移住した日本人で、幼い頃から日本語や日本食に慣れ親しんできた。また、14歳の時からブラジルで沖縄出身の空手家に師事し、武道の精神を叩き込まれている。「そのおかげで、平成2年(1990年)に浜松へ来てすぐの頃、日本語能力試験の1級に一発で合格。普通2種免許も取得することができました。その後は、浜松でタクシー運転手をしながら、空手修業を続けたんです」。

児玉館長も、当初は日本で空手の経験を積んだ後、ブラジルに帰って道場を開く予定だった。しかし、ともに来日した二人の子どもたちから「日本に残りたい」と懇願され、浜松永住を決めたという。「子どもたちは日本の学校になじんでいるし、幼い頃に離れたブラジルのことはよくわからない。その気持ちを優先し、日本で空手の道を究めようと決心したんです」。

そしてもう一つ、児玉館長が永住を決めた理由がある。それは「日本語をうまく話せない日系ブラジル人と、その子どもたちをサポートしたい」という思いだった。言葉ができなければ地域社会になじめず、孤立感を深める。そのため若者たちが集団で夜の繁華街にたむろし、非行に走るケースもあった。そこで、児玉館長は平成18年(2006年)から街中で「夜回り」を行い、日系ブラジル人の若者を善導するよう務めた。平成23年(2011年)の東日本大震災をきっかけに、浜松のブラジル人が大幅に減少するまで、夜回

り活動を続けたという。

「浜松にはピーク時で約1万9000人の日系ブラジル人が住んでいましたが、現在は約1万人とほぼ半減しています。しかし、この1万人はしっかりとした意識をもって定住を選んだ人たち。もはや“デカセギ”ではありません。その子どもたちも日本生まれ、日本育ちが多く、地域社会に溶け込んでいます。その上で自分たちのルーツも大切にする『ブラジル系日本人』だといえるでしょう」

現在、「魂誠會」では50人ほどの生徒を指導し、その中に日系ブラジル人の子どもたちも少なくない。「子どもたちには、空手を通して日本精神を養い、学校でもしっかり勉強して大学進学まで目指してほしいと願っています。それによって、ブラジルルーツの人が普通に活躍し、地域社会に貢献できる世の中になっていけばうれしいですね」と、児玉館長は話している。

## 日系人の過去と現在をモノクロ写真で描写

さて、ここでもう一人、この地域で活躍する日系ブラジル人を紹介しよう。写真家のジュニオール・マエダさんだ。マエダさんは平成2年(1990年)、父や叔父とともに15歳で来日。日本語を学びながら千葉県自動車部品工場

などで働き、平成21年(2009年)、浜松へ移住した。その後、磐田市のブラジル人向け写真学校で撮影技術を学び、現在はシキ写真館(磐田市)に所属してプロカメラマンとして活躍している。平成31年(2019年)2月、マエダさんはブラジル移民110周年記念のイベントで、ある連作の写真を発表した。それは、30年前の日系ブラジル人の姿を再現した写真と、現在の日系ブラジル人を撮影した写真を組み合わせたシリーズ作品。メッセージ性を高めるため、あえてモノクロで表現した。本誌3ページの特集扉に掲載したのはその一部で、左側が30年前、右側が現在を表している。作品のテーマについて、マエダさんは次のように述べる。

「30年前、私たちが初めて来日した頃は、日本語をほとんど話せず、3K(危険、きつい、きたない)の仕事しかできませんでした。でも、みんな必死で働きましたね。そんな当時の光景を古い工場などで再現し、写真として記録することで、自分たちの想いを多くの人に伝えたかったんです」。

マエダさんのカメラは、日系ブラジル人の様々な姿をとらえる。慣れない機械操作を懸命に習う姿、故郷に残した家族に手紙を書く姿、国際電話を掛けるため電話ボックスに長い行列をつくる姿。まだネットも携帯電話も普及してい

なかった時代、日系ブラジル人たちが何を思い、何を心のよりどころにしていたかをマエダさんの写真は克明に描いている。

そして、30年後の現代の写真。そこに映し出されているの



▲光明山遺跡の一角に建てられた平野運平の記念碑

は、日本に定着し、たくましく生きる日系ブラジル人の新しい姿だ。ある人は企業経営者、ある人はタレント・モデル、ある人は作家一。また、日本で家庭を築き、持ち家を建て、子どもたちを大学などへ進学させた人も数多い。

「30年前に比べ、今は在住外国人への公的サポートが充実しているほか、ブラジル人向けのスーパーやレストランもたくさんあります。でも、それもすべて、先人たちが真面目に頑張ってきたからこそ。過去の積み重ねの上に恵まれた現状があることを、若い人たちに知ってもらいたいですね」と、マエダさんは強調している。

浜松市天竜区山東、気田川の東にそびえる標高539メートルの光明山。かつて光明寺という寺院が築かれていた遺跡の一角に、一つの記念碑がひっそりとたたずんでいる。その表面に刻まれているのは「拓魂」の文字。日本ブラジル移民の恩人である平野運平の功績を称え、浜松在住の日系ブラジル人たちが建てたものだ。運平ゆかりの地に建つ碑は、日本とブラジルの絆の象徴として、これからも地域を見守り続けていこう。



▲日系ブラジル人の過去と現在を写した写真パネルの前に立つジュニオール・マエダさん



▲『ブラジル系日本人』の愛弟子とともに。左が河野武君(中3)、中央が石井ゆうじ君(小6)